

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 2016年度国際研究フォーラム「東アジアのグローバル化と宗教文化」報告書

|       |                                                                                                               |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2024-06-28<br>キーワード (Ja): 162.2<br>キーワード (En):<br>作成者: 井上, 順孝<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/0002000507">https://doi.org/10.57529/0002000507</a>                         |

# 中国共産党の宗教政策とグローバル化

川田 進  
大阪工業大学 教授

## 一、北京の宗教スポット・雍和宮

中国社会は今、仏教ブームに沸いている。北京でそのブームを実感できる宗教スポットといえば雍和宮界隈であろう。場所は北京市東城区の安定門東大街と雍和宮大街が交差する一角にあり、最寄り駅は地下鉄2号線と5号線の「雍和宮」である。

現在、雍和宮の周辺（雍和宮大街沿い）には、線香、仏具、僧衣、仏像、仏教書、仏教音楽等を商う個人商店が軒を連ねており、狭い路地を入ると風水占い、姓名判断、運命鑑定看板がずらりと並んでいる。隣接する五道営胡同には、伝統家屋を再利用して菜食レストランや画廊、カフェ、雑貨屋がオープンし、若者や外国人が集う場所として注目されている。そして雍和宮の斜め向かいには、歴代王朝の学問所である国子監と孔子廟があり、この界隈は仏教、占い、現代アート、学問といった諸要素が混在する不思議な空間へと成長中だ。



図1 雍和宮付近の地図

雍和宮は1694年に創建され、清の雍正帝（1678－1735）が即位前に居住していた頃は雍親王府と呼ばれていた。雍正帝の即位後、王府の半分がチベット仏教寺院に改築され、名も雍和宮と改められた。雍正帝の没後、雍和宮で生まれた乾隆帝（1711－99）の命により全体が寺院に改修された。チベット仏教寺院として一般開放されたのは1981年である。

その後 1990 年代に入ると、国内外の観光客や仏教徒が多数参拝に訪れるようになった。2015 年に雍和宮の関係者に確認したところ、一日の参拝者数は約 1 万人。雍和宮のウェブサイトによれば、春節（旧暦正月）の時期は一日に数万人が押し寄せるとのこと（注 1）。

参拝者の大半は仏の加護により延命、息災、治病、進学、商売繁盛等の現世利益を求める民衆であり、チベット仏教徒は少数にすぎない。そして、来訪者の目当ては、雍正帝と乾隆帝ゆかりの寺院に安置された靈驗あらたかな仏像である。それは万福閣にある高さ 23 メートルの弥勒菩薩であり、ネパール国王から賜ったインド産の白檀を用いた一木造りとして知られている〔雍和宮管理处編 1999:72-73〕。

一見したところ穏やかな祈りの風景に思われるが、その背後には政治の影が見え隠れしている。

## 二、中国政教関係の舞台・雍和宮

現在の雍和宮は中国政府が認可した「模範的な」宗教活動場所であり、同時に政治宣伝活動の窓口でもある。そのことを示すいくつかの事例を雍和宮のウェブサイトから紹介する。

### (1) 無煙線香を配布し環境改善に貢献

中国が抱える社会問題の一つは大気汚染の悪化である。原因は工場からの排煙、自動車の排気ガス、暖房や炊事に用いる粗悪な練炭等である。深刻な汚染状況が解消されず国民のいら立ちが高まる中、危機感を抱く政府は環境保護関連の部署を通じて成果主義を導入した。今や汚染問題対策に失敗すると、政治家や企業の幹部は失脚する時代である。北京の役人は「徹底的に煙を排除せよ」という号令を発し、取り締まりの強化に乗り出した。



図 2 雍和宮門前の線香屋（2013 年 12 月、筆者撮影）

これまで雍和宮への参拝者は、門前の個人商店で購入した線香を持参していた。「参拝者の増加は煙害の拡大を招く」と判断した北京市当局は、雍和宮の管理事務所に具体的な対策を講じるよう命じた。そこで胡雪峰住持（中国仏教協会副会長を兼任、1966-）は、中国共産党の環境政策に従い、国家宗教事務局（日本の内閣に相当する国务院直属組織、1954 年創設）と中国仏教協会（北京、1953

年創設）の指導の下、2013 年以降、外部で購入した線香の持ち込みを禁じ、煙の発生を抑えた短いサイズの線香を配布する方法に切り替えた。その結果、粗悪な線香が発する煙を排除し、北京の大気汚染改善に大きく「貢献」した（注 2）。実際にどれほどの成果が得られたかは不明であるが、線香と大気汚染対策も中国では宗教管理の一環に含まれるのである。中国国内で宗教活動を行う際、国家宗教事務局の指示に異義を唱えることは極めて困難である。

## (2) パンチェン・ラマ 11 世主宰ネパール震災犠牲者追悼法会

雍和宮とパンチェン・ラマの関係は古くて深い。パンチェン・ラマはチベット仏教ゲルク派においてダライ・ラマに次ぐ化身ラマ（転生僧、トウルク）の称号である。パンチェン・ラマ 6 世（ロサンペルテンイェーシェー、1738-1780）、9 世（ゲレクナムゲル、1883-1937）、10 世（ロブサン・ティンレー・チューキ・ギャルツェン、1938-1989）は、雍和宮を弘法活動の重要な拠点とし、清朝、中華民国、中華人民共和国の各政権と協力関係を結んできた（〔黄崇文 2001〕に詳しい）。



図 3 中国政府認定パンチェン・ラマ 11 世(中央)と胡雪峰住持(右)

図 3 は 2015 年 4 月 25 日にネパールで発生した震災犠牲者追悼法会を主宰するため雍和宮を訪れた中国政府認定の 11 世（ジェンツェン・ノルブ、1990-）である。震災の被害は隣接するインド、バングラデシュ、中国にも及び、8000 人を超す死者の大半はチベット仏教徒であった。震災から 5 日後の 4 月 30 日、11 世は雍和宮と中国チベット語系高級仏学院（北京、1987 年創設）の僧 210 名とともに死者を弔い、中国仏教協会を通じて 20 万元（約 400 万円）の義捐金を被災地に届けた（注 3）。

この追悼法会には、宗教的役割と政治的役割があると考えられる。つまり、チベット仏教の高僧が主宰する宗教行事であるとともに、チベット仏教と中国共産党の「良好な」関係を国の内外に示す政治的な役割も担っている。法会の開催を支えた中国仏教協会と中国チベット語系高級仏学院は、「愛国愛教」を理念に掲げ中国政府との連携を重視する宗教組織と宗教教育機関である。そしてパンチェン・ラマ 11 世は、中国政府が認定した愛国的宗教指導者として、中国仏教協会副会長と中国人民政治協商会議第 12 期全国委員会常務委員という要職に就いている。したがって、チベット仏教寺院雍和宮で執り行われた追悼法会は、現代中国における政教関係を色濃く反映したものと言える。

## (3) 対外宣伝活動の窓口

中国政府は北京を訪問した海外の要人を雍和宮に案内することがある。雍和宮ウェブサイトによれば、例えば 2016 年にブルガリアの副首相（1 月）、ポーランドの外務大臣（4 月）、インドの国防大臣（5 月）、ハンガリーの国会議員（11 月）、イタリアの元老院（上院）議長（12 月）が見学した際、胡雪峰住持が自ら案内役を務めて来賓をもてなしている。

2016 年 6 月、雍和宮改築 270 周年を記



図 4 バリカル・インド国防大臣(右)



念した座談会の席で、中国人民政治協商会議の幹部は次のように語った（注4）。  
「雍和宮は北京市の民族宗教活動が対外宣伝を行うための窓口である」（朱維群・全国政協民族宗教委员会主任）

「雍和宮は首都仏教界の代表として、和諧社会を建設する上で積極的な役割を果たしてほしい」（吉林・北京市政協主席）

中国人民政治協商会議は中国共産党と中国政府の政策を議論し助言を行う統一戦線組織であり、パンチェン・ラマ 11 世のように宗教組織や少数民族の幹部も選出される。朱維群が言う「対外宣伝の窓口」とは、例えば次のような事例を指す。

現在チベット仏教ゲルク派にはパンチェン・ラマ 11 世が二人いる。一人は中国政府が認定した 11 世。もう一人はダライ・ラマ 14 世が認定した 11 世（ゲンドゥン・チューキ・ニマ、1989-）であり、認定直後から中国政府の保護（監視）下にあり、現在も安否不明である。中国政府認定の 11 世が愛国的宗教指導者として雍和宮という政教関係の舞台に立ち、立派に法会を成功させた姿を報道することは、インドへ亡命中のダライ・ラマ 14 世、諸外国の政府や人権擁護団体に対する政治宣伝活動なのである。

### 三、雍和宮近隣の二つの書店

雍和宮の近くには仏教書を扱う専門店が数軒ある。いずれも個人経営であり、漢語書籍を中心に扱っている。利用客の多くは漢人（漢族）や台湾人の在家信徒である。図 5 はある書店で販売されていた DVD であり、カルマパ 17 世（ウゲン・ティンレー・ドルジェ、1985-）の説法が収録されている。



図 5 カルマパ 17 世の説法を収録した DVD  
(2012 年 12 月、筆者撮影)

2000 年 1 月、中国チベット自治区のツルプ寺を脱出したカルマパ 17 世がインドのダラムサラ（チベット亡命政府の所在地）に到着し、ダライ・ラマ 14 世（1935-）への謁見を果たした（注 5）。14 歳の少年僧が、凍傷を負いながらヒマラヤを越えたこの劇的なニュースは世界を驚かせた。カルマパ 17 世はチベット仏教カルマ・カギュ派最高位の化身ラマであり、1992 年にダライ・ラマ 14 世と中国政府が共に認定したことで知られる。

中国政府はカルマパを社会主義社会に適応した愛国的宗教指導者に育てる意図をもっていたが、彼は政府の過剰な干渉を嫌い、宗教活動の自由を求めてインドへ亡命し、現在ダラムサラ郊外のギュートー僧院で修行中である。

カギュ派はチベット仏教四大宗派（ゲルク派、カギュ派、ニンマ派、サキャ派）の一つであり、ダライ・ラマが属するゲルク派より長い歴史を持つ。化身ラマの制度は 13 世紀にカギュ派から始まったものであり、その後他の宗派が採用した。ダライ・ラマ 14 世、カルマパ 17 世など、海外へ亡命したゲルク派やカギュ派の高僧の多くが、中国共産党の

宗教政策に異議を唱えている。

次の写真（図6）はチベット仏教関連の書籍を専門に扱う個人経営の書店である。入口には「ラルン五明仏学院関連書籍取り扱い」の表示がある。主に中国国内で活動するチベット仏教ニンマ派の高僧の中には、共産党の抑圧的な宗教政策に対して、抵抗と協力という両面の姿勢（統一戦線活動への対応）を巧みに用いて、国内外で活発な宣教活動が続ける者がいる。例えば、図6右下のケンポ・ソダジ（1962-）は、中国最大規模の宗教教育機関ラルン五明仏



図6 ラルン五明仏学院の高僧が著した仏教エッセイ集を並べる書店  
(2015年11月、筆者撮影)

学院（1980年仏教講習所開設、1997年仏学院認可、所在地：四川省甘孜チベット族自治州色達県、以下仏学院と略す）に所属するニンマ派の高僧であり、右上のジグメ・プンツォ（1933-2004）は仏学院の創設者（初代学院長、ソダジの師僧）である。ダライ・ラマ14世の亡命から五十数年を経過した今、中国国内のチベット仏教各宗派が置かれている状況は一樣ではない。

筆者が現在注目するチベット仏教の高僧は、中国国内に留まり精力的に宗教活動に従事してきた二人である。一人はニンマ派のケンポ・ソダジ。仏学院の実質的な運営責任者であり、急増する漢人出家者や在家信徒の指導役である。筆者は2015年に東京で、ケンポ・ソダジの講演を聴き、座談会に参加したことがある。もう一人はカギュ派のケンポ・カルツェ（1975-）。コンヤブ寺（所在地：青海省玉樹チベット族自治州囊謙県）の教学責任者であり、筆者は2013年に彼を訪問し、学問と信仰が直面する問題について聞き取り調査を行った。

ケンポとは学堂長や僧院長を意味するチベット語である。二人のケンポは学問に優れ、東チベットで多くの信徒に愛され、漢語能力が高く、震災支援活動など共産党が提唱する宗教公益政策に協力的であるという共通点を持つ。ところが国際研究フォーラムが開かれた2016年10月当時、ケンポ・ソダジは国内外で積極的に弘法活動を行う一方、ケンポ・カルツェは懲役刑を受け獄中にあった。

それでは次章にてプロレタリア文化大革命（以下文革と略す）終結後、具体的には鄧小平から習近平時期の宗教政策の流れを概観した後、彼らの宗教活動に焦点を当て、仏教ブームと権利擁護活動の事例から二人の高僧が明暗を分けた理由を考える。

#### 四、中国共産党の宗教政策（鄧小平から習近平まで）

##### （1）党の宗教政策と政府の宗教管理

現代中国の宗教状況を論じる際、「無神論と信教の自由」という難題に悩まされる。「宗教政策をめぐる党と政府の役割が不透明」という指摘もしばしば耳にする。中国は共産党

が指導する国家であるため、常に党が政府の上に位置している。つまり、中国政府は党が定めた宗教政策に従い、宗教関連の条例や規定を整備し、公民の宗教管理を行う任務を負っている。

宗教政策を決定する部署は党中央統一戦線工作部である。統一戦線活動とは、共産党が宗教組織や宗教指導者など党外の勢力と交渉を行い味方に付ける戦略を指す。党の政策に沿って宗教管理を行う部署は、国家宗教事務局（日本の内閣に相当する国務院直属の組織）である。政府が行う宗教管理は、対象となる宗教組織や宗派により対応が異なる場合があり、その実態をつかむことは容易でない。

共産党の宗教信仰に対する立場は無神論であり、宗教をアヘンにたとえたマルクス主義宗教観は、毛沢東から習近平の時代まで堅持されている。ただし文革終息後、共産党は「中国の特色ある社会主義」を実現する過程で宗教の存在と意義を公式に認めている。つまり共産党自身の手で「マルクス主義宗教観の中国化」が進められているのである。中国政府が公認する宗教は仏教、道教、イスラーム、カトリック、プロテスタントのみに限られており、中国国籍を持つ公民は政府公認の宗教を信仰する自由を有するが、党員には信教の自由が認められていない。ただし、実際は信仰を持つ党員が急増中であり、党中央は「中国共産党員の宗教信仰問題を適切に解決することに関する通知」を出し、具体的な対処方法を示した〔中共中央組織部 1991〕。

文革後の宗教状況を観察する際、無神論という看板に惑わされるのではなく、党の最高指導者（中央委員会主席や総書記等）がマルクス主義宗教観をどのように中国化し、宗教政策に取り込んだのかを見定めることが重要である。新指導者は前任者の宗教政策を継承しつつ独自の政策を盛り込むため、各指導者により中国化の指針は一樣ではない。以下、鄧小平から習近平時期における宗教政策の流れを中国化の視点から概観する（詳細は〔川田 2015：第 1 章〕を参照）。

## **(2) 鄧小平時期（1977－89 年）の宗教政策（脱文革、宗教復興）**

文革終息後、1977 年に鄧小平（1904－97）が党中央副主席に就任後、実質的な党の指導者となった。鄧小平時期における重要な党の通達は、宗教政策の脱文革宣言という性格を持つ「中共中央 1982 年 19 号文件」〔中共中央 1982〕である。主な内容は文革時期の宗教弾圧への反省、政府による宗教管理の再開、寺院や教会の再建促進等である。鄧小平は統一戦線活動の活発化を指示し、ダライ・ラマ 14 世の帰還問題も議論の対象とした。そして、愛国宗教組織の活動強化方針を打ち出した結果、統一戦線活動を担う中国仏教協会等 5 団体が活動を再開し、中国天主教主教団等 3 団体が新設された。

## **(3) 江沢民時期（1989－2002 年）の宗教政策（「三原則」）**

1989 年に発生した第二次天安門事件の混乱を終息させる目的で、鄧小平は上海で統治実績をあげた江沢民（1926－）を党中央総書記に抜擢した。江沢民時期の重要な通達は「中共中央 1991 年 6 号文件」〔中共中央・国務院 1991〕であり、内容は鄧小平の宗教政策を継承発展させたものである。そして、1993 年に発表した「宗教政策三原則」（①党の宗



教自由化政策を徹底する、②法に基づき宗教管理を強化する、③宗教と社会主義の適応を導く）に江沢民の独自色が表れている〔江沢民 1993:253-255〕。とりわけ宗教活動場所の登記、集会やデモの制限、カルト対策等、法に基づく宗教管理の強化と宗教活動の規制には、国内のカトリックやチベット仏教が外国の組織と連携することを断ち切り、中国の政策を批判する外圧をかわす意図が込められている。

#### (4) 胡錦濤時期（2002－12 年）の宗教政策（「四原則」、「宗教と和諧」政策）

2001 年、第 16 回党大会にて胡錦濤（1942－）の党中央総書記就任が決定した。この時、江沢民は党大会の報告の中で、先の「三原則」に「独立自主自営」（外国勢力の影響排除、民主管理委員会による組織運営、財政基盤の保持）の項目を加えた「宗教政策四原則」を発表し影響力を残した〔江沢民 2002:32〕。胡錦濤はこの「四原則」を宗教政策の柱にすえ、「宗教事務条例」（2004 年）を制定することで「法に基づく宗教管理」（「四原則」の一つ）を具体化した。新政策の注目点は、経済優先路線を見直し和諧（調和のとれた）社会を実現する上で宗教が持つ慈悲や慈愛の精神を活用する方針である。そしてチベット騒乱（2008 年）、ウイグル騒乱（2009 年）の発生後、「宗教と和諧」政策（2010 年）を掲げ、宗教組織に貧困扶助、災害救助、教育支援等への参画を促した〔国家宗教事務局宗教研究中心 2010：2-11〕。これは江沢民の「四原則」の一つ「宗教と社会主義の適応を導く」を発展させたものであり、江沢民時期の過度な宗教管理を調整する意図を含んだ胡錦濤流「マルクス主義宗教観の中国化」と言える。

#### (5) 習近平時期（2012 年－）の宗教政策（シルクロード宗教交流政策）

2012 年、第 18 回党大会は習近平への指導部交代を承認した。党の政策の一貫性を保つ上で、習近平が鄧小平の「19 号文件」、江沢民の「四原則」、胡錦濤の「宗教と和諧」政策を継承発展させることは既定方針である。2016 年当時、習近平の新たな指針はシルクロード宗教交流政策である。これは習近平が 2013 年に打ち出したシルクロード経済圏構想（一帯一路）の実現に向けて宗教界に協力を要請する政策である（注 6）。「一帯」は中央アジアからヨーロッパに通じる「陸のシルクロード」、「一路」は東南アジア、インド、中東、アフリカからヨーロッパに至る「海のシルクロード」を指している。新政策の骨子は、二つのシルクロードに関係する六十数カ国との宗教交流及び宗教間対話の推進である。習近平流の「中国化」は、宗教を経済活動や外交の道具に用いるという乱暴な側面を内包しているため、今後の推移をしっかり見届ける必要がある。



図 7 陸と海のシルクロード「一帯一路」構想



## 五、ケンポ・ソダジの弘法活動と仏教ブーム

### (1) 来日講演活動を支えた日本菩提学会

2015年11月、仏学院の高僧ケンポ・ソダジが初来日した。東京大学（11日）や早稲田大学（13日）等で講演を行った後、平和祈願観音法会（15日）を開催した。筆者は安富歩先生（東京大学東洋文化研究所教授）が主宰した講演「チベット仏教思想」（場所：東大伊藤謝恩ホール）を拝聴した後、来日記念座談会（場所：東大東洋文化研究所）に参加した。



図8 東大で講演するソダジ師  
(2016年11月、川田撮影)

東大講演の聴衆は200名を数え、会場内は熱気に包まれた。来場者は日本の研究者や宗教関係者を除けば、9割以上が在日華人であり、信徒たちはラインやフェイスブックで講演情報を知り来場していた。ソダジ師の講話の骨子は、①チベット仏教各宗派の特徴、②外国におけるチベット仏教・チベット文化の受容、③チベット仏教が持つ智慧の力の三点であった。以下に②と③の要旨を掲げる。

近年、外国人研究者や観光客がチベットの仏教や文化を紹介する現象が拡大している。関心の高まりは大いに歓迎するが、チベットブームに便乗した表面的なチベット理解が広まることを危惧する。多くの外国人はチベットの風土に根ざした仏の教えに触れることで安心感を得ている。その安心感を支えるのは智慧、慈悲、そして利他の心である。仏教の教義から論理的な思考力を養い、智慧を育む生き方を身に付けて欲しい。日本の社会が重んじる礼儀と秩序には、仏教の考えが浸透していると思われる。

その後、聴衆との質疑応答の際にも、思いやり・規則・忍耐・努力・冷静に支えられた智慧、すなわち正しく物事を認識し判断する能力の大切さを重ねて説いた。つまり、ソダジ師の講話は専門家を対象に中観や唯識論を論じたものではなく、聴衆が日々の生活に宗教的实践を採り入れることを通して、自分本来の姿を自覚することを促す内容であった。

今回ソダジ師の来日を要請し準備にあたったのは、日本菩提学会（2014年成立）である。菩提学会はケンポ・ソダジに師事する漢人・華人信徒を主体とする組織であり、日本の他にアメリカ、カナダ、ヨーロッパ、オーストラリア、東南アジア、香港、台湾に支部を持つ。菩提学会の活動状況は国際仏学会のウェブサイト（2013年開設）に紹介されており、ソダジ師を中心とした宗教ネットワーク拡大のスピードは目を見張るものがある（注7）。

### (2) 仏教エッセイ集がベストセラーに

中国は今、仏教本ブームに沸いている。大型書店にはチベット仏教の高僧が執筆した人生指南書、自己啓発書、仏教入門書が多数並び、いずれも売れ行きは好調である。中でもソダジ師の複数の仏教エッセイ集はベストセラーとなり話題を呼んでいる。以下に注目度の高い三人の高僧の著作を掲げる。

- (1) ソダジ『苦しみこそが人生』[索達吉堪布 2012a]
- (2) ツティン・ロドゥ『われわれはなぜ幸福でないのか』[慈誠羅珠堪布 2014]
- (3) シェーラ・ゾンボ『寂静への道』[希阿荣博堪布 2012]

(1) と (2) の主な読者は競争社会・経済格差・親族の病・人間関係などに苦悩する者、自己肯定感や達成感に乏しい高学歴者、そして仏教が説く智慧を獲得すべく自己啓発に励む者等である。内容はチベット仏教の教えを素材とし、漢人の一般読者に「心の重荷を降ろしなさい」「しっかり自分を肯定しなさい」「他人の幸せも願いなさい」と語りかけたものである。(3) は仏教に関心を持つ者、仏門を志す者を対象とした入門書であり、四法印(諸行無常、諸法無我、涅槃寂静、一切皆苦)、修行心得(帰依、菩提心、密教、聞思修、放生等)、六度万行(布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧)から成る。

三人の共通点は仏学院出身の高僧である。仏学院はケンポ・ジグメ・プンツォが1980年に開設したチベット仏教を総合的に学ぶための教育機関であり、学僧数は1万を超えると推定される。近年漢人の出家者や在家信徒が増えたため、漢語の流暢な三人の高僧はその対応に追われている(シェーラ・ゾンボは仏学院を離れ自らの僧院で活動中)。各著作は高僧自身が漢語で執筆したものもあれば、高僧の説法を漢人の弟子が整理したものもある。

趣旨を同じくする著作の刊行は、中国の達照法師(中国天台宗管長)『一步譲ることはたやすい』[達照 2015]、伝喜法師(寧波市慧日禅寺)『永遠の甘露』[伝喜法師 2014]、台湾の星雲大師(仏光山開祖)『だいじょうぶ』[星雲大師 2015]、ベトナム出身の一行禅師『幸福は全幅の信頼から生まれる』[一行禅師 2015]等、引きも切らない。各著作には読者の疲弊した心を癒やした後、積極的に人生や死と向き合う姿勢を導く役割が託されており、通底するキーワードは幸福、信頼、共感、智慧、そして胡錦濤が唱えた和諧である。

### (3) 胡錦濤「宗教と和諧」政策との連携

2016年4月6日、NHK総合テレビ「クローズアップ現代+(プラス)」が中国の仏教ブームを特集した(「経済減速 中国で仏教大ブーム!?!」)。過度なプレッシャーや競争社会の中で疲弊した若者(高学歴者を含む)が仏教信仰に走る現象を北京、四川省、青海省で取材した内容である。チベット仏教カギュ派のダンカー(当卡)寺(青海省玉樹県)で出家した音楽関係者も紹介された。番組出演者の興梠一郎氏(神田外語大学)が、「中国政府が仏教を政権維持の安定装置として利用する意図を持つ」と論じたように、仏教ブームは党の宗教政策に沿って作られた一面も持っている。

仏教本の出版が雨後の筍の様相を見せはじめたのは、国際仏学会が成立した2011年以降である。相次ぐ刊行は高僧や出版社の自主的な判断とはいいがたく、筆者は共産党の宗教政策が強く後押しした結果であると考え。胡錦濤が「和諧社会の実現」をスローガンに掲げたのは2004年であり、その3年後に開かれた第17回党大会(2007年)の政治報告の中で「宗教界の指導者と信者に経済と社会の発展を促す上での積極的な役割を発揮させる」と決意を表明した。同様の文言が「中国共産党規約」にも追加された結果、宗教界に対する社会貢献の要請は一層鮮明となり、後に国家宗教事務局は「宗教と和諧」政策の

実施を宣言したのである。その背景には党や政府幹部の汚職と腐敗、医療や教育の格差、失業者や非正規労働者の増加、環境破壊という社会の負の側面を緩和していく上で、宗教の力は不可欠という政権判断があったと考えられる。具体的な役割として、貧困扶助、災害救助、身体障害者や高齢者への援助、僻地での教育支援、ボランティア医療等が期待された。

したがって、2011年に突如出現した仏教本ブームは、「宗教と和諧」政策に呼応する形で生まれたと筆者は考える。とりわけケンボ・ソダジは『実践してこそ達成できる』[索達吉堪布 2012b]『離れず』[晋美彭措 2014]『何を急いでいるのか』[索達吉堪布 2015]等のヒット作で得られた印税及び漢人信徒からの布施を、困窮する仏学院出家者の生活支援、僻地における智慧学校や菩提病院（ともに四川省炉霍県）建設等の公益慈善事業に投じた。中国政府は高僧が教育や福祉に積極的な関与を行うことを支援する方向にある（[嘎・達哇才仁 2010:180-181]）。

#### (4) 習近平「シルクロード宗教交流政策」との連携

東京大学で筆者がソダジ師と会談した際、「ヨーロッパとアフリカでの活動を終えてから日本へやって来た」「アフリカでは講演活動の他に、孤児院への支援を行った」という彼の発言を聞いて、なぜアフリカ訪問なのかと少々戸惑った。ソダジ師の宗教活動を紹介する国際仏学会のウェブサイトには、確かに2015年9月中旬から二ヶ月に及ぶ弘法の旅の様子が掲載されている。ヨーロッパ（イタリア、フランス、オーストリア、オランダ、イギリス）とアフリカ（南アフリカ、レソト、ナンビア）を歴訪後、11月9日に最後の訪問国である日本に到着という旅程である。

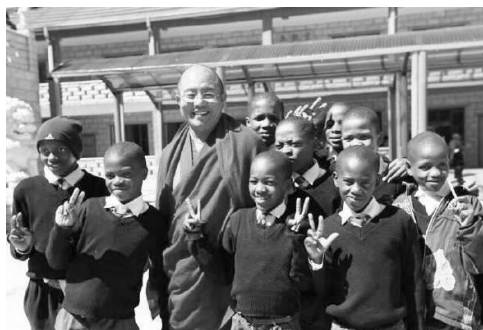


図9 レソトの孤児院を訪問するケンボ・ソダジ（2015年11月）

ソダジ師は訪問各国の大学で「智慧と慈悲」（9月27日、オランダ）、「仏教から見た幸福とは」（10月20日、ロンドン）、「菩提心」（10月30日、南アフリカ）、「信仰と科学技術」（11月2日、レソト）等、仏教をテーマに社会生活に根ざした内容の講演を精力的にこなした。使用言語はすべて漢語であり、訪問先の漢人信徒が現地の言語に翻訳した。

中国にとってヨーロッパは重要な貿易相手国であり、移民・留学・出張・観光などで多くの華人が居住している。そして、ヨーロッパにはチベット仏教の教義や瞑想、美術などに興味関心を抱く知識人や一般市民が一定数いることが知られている。一方、中国政府にとってアフリカは資源採掘、貿易、インフラ輸出、国連外交等を行う戦略的な地域であるが、これまでチベット仏教の高僧が布教活動の対象と見なすことはなかった。

そこで先ほどの「アフリカで孤児院への支援」という言葉が「2015年ソダジ弘法の旅」を読み解く鍵となる。筆者は孤児院への支援は胡錦濤の「宗教と和諧」政策への貢献、アフリカ訪問は習近平のシルクロード宗教交流政策への対応と考える。つまり、仏学院のあ



る中国四川省からヨーロッパへの経路は陸のシルクロード（一帯）を指し、ヨーロッパからアフリカを経由し日本に至る経路は海のシルクロード（一路）を指す。「一帯一路」つまり二つのシルクロード上の国々と宗教交流、宗教間対話を行うことを掲げた宗教政策と合致する。ただし、習近平が掲げる「一帯一路」シルクロード経済構想及び中国が提唱主導するアジアインフラ投資銀行の開設に対して、世界の主要国から賛否両論がわきおこっているため、宗教交流というソフトな政策は、経済外交から生じた不協和音を和らげる役割も担っている。

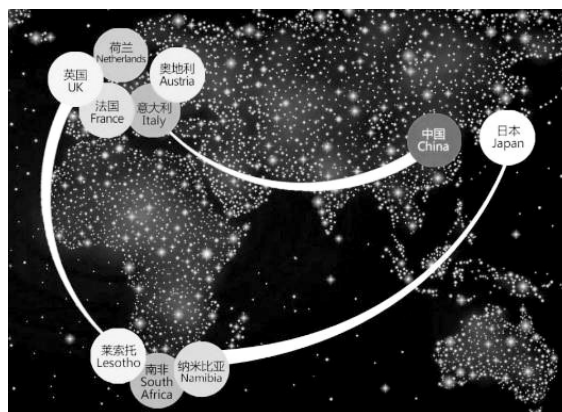


図10 2015年ソダジ「シルクロード宗教交流」の旅

## 六、ケンポ・ソダジの宗教活動と統一戦線活動への対応

以上の事例から、ケンポ・ソダジは時の権力に道具として利用されているように見えるが、両者の関係は単純ではない。文革終結後、共産党は無神論を掲げつつも一方で宗教の存在を肯定し必要としてきた。共産党は信徒に強い影響力を持つ宗教指導者に積極的に働きかけ、彼らが党への協力姿勢を示せば宗教活動の「自由」を保障する。平たく言えば、これが共産党の統一戦線活動である。ただし、活動の自由には制約があり、あくまでも党や政府の掌の上にある。宗教指導者が権力に対して拳を振り上げると、権力者は容赦なく活動の自由を握りつぶしてしまう。

ケンポ・ソダジは智恵のある高僧だ。権力に一方的に利用されるのではなく、自ら権力にすり寄っているのでもない。権力に協力姿勢を示しつつ、権力と交渉し、自らの宗教活動の空間を拡げる努力をしているのである。例えば2012年に中国社会科学院（社会科学の最高学術機構）が主催した「宗教慈善と社会発展シンポジウム」に登壇し、チベット仏教が参画する慈善公益事業について報告を行った〔卓新平・鄭筱筠 2015:134-153〕。上海慈慧公益基金会（2011年登録）の結成に協力し、貧困児童や高齢者の支援にも尽力した。そして2010年以降、中国各地の大学で仏教・智恵・幸福・科学等をテーマに講演し、党・政府及び知識人を味方に付ける術を学んだのである。仏学院の運営と教学の責任者であるケンポ・ソダジは、2010年以降、仏学院を留守にする期間が長くなった。彼の行動の意図を、筆者は次のように考える。

### (1) 仏学院の存続と維持

江沢民の時期に仏学院は尼僧の放逐、僧坊撤去、ジグメ・プンツォ学院長幽閉等の粛正を受けた（2000-01年）。当局は規模の巨大化や学院長の強大な宗教的影響力を問題視し監視下に置いたのである。そして2004年に学院長は「仏学院の存続を切に願う」という



遺言を残して遷化（逝去）した。ケンポ・ソダジを中心とする仏学院の後継者たちは、学院長の遺志を継ぎ、仏学院を存続させるためには、党の統一戦線活動への積極的な対応を通じて権力と良好な関係を保つことが得策であると判断した。時の権力に対する面従腹背の姿勢は、社会主義中国を生き抜くために仏が授けた智慧であった（詳細は〔川田 2015:5 章〕を参照）。

## (2) ソーシャルキャピタルとしての仏学院

学院長遷化後、胡錦濤政権は仏学院を肅正対象から切り離し、社会の信頼関係を担うソーシャルキャピタル（社会関係資本、社会の信頼関係・規範・ネットワークといった社会組織の重要性を説く概念）として役立てる方針に転換した。従来ケンポ・ソダジは、学院長の右腕として仏学院の師僧と学僧、仏学院内の異なる宗派をつなぐ結束型ネットワークの象徴であった。その後、チベット仏教の教えを媒介に、地域を越えてチベット人と漢人・華人を結びつける橋渡し型ネットワーク形成の担い手としての期待が高まった。そこには、胡錦濤政権が宗教的ソーシャルキャピタルを活用して、地域の安定と民族の団結を旗印とした和諧社会の実現を目指すという思惑が隠されていた。政府が白羽の矢を立てたケンポ・ソダジは、江沢民時代に受けた政治の逆風という苦い経験を教訓にして、胡錦濤の「宗教と和諧」政策を追い風に社会主義社会を駆け抜け、仏学院の存続を確かなものにすべく奮闘しているのである（詳細は〔川田 2015: 第 8 章〕を参照）。

## 七、カルマ・カギュ派の高僧ケンポ・カルツェの挫折

### (1) コンヤブ寺と「二〇一三年ケンポ・カルツェ事件」

2013 年 8 月、筆者は青海省のコンヤブ（公雅）寺を訪問した。コンヤブ寺は青海省とチベット自治区の境界付近に位置し、15 世紀に創建されたチベット仏教カルマ・カギュ派（カギュ派の最大支派）の古刹であり、約 300 名の僧を抱えている。2001 年以降ほぼ毎年世界平和祈願大法会を開催し、宗派を超えた宗教活動（リメ運動）の拠点の一つでもある。近年漢人居住地区での弘法活動に熱心であり、囊謙県内に孤児学校を開設し慈善活動にも力を注いでいる。高僧の話では、過去にコンヤブ寺を調査した外国人研究者はいない。

ケンポ・カルツェ（青海省囊謙県出身）はカルマ（噶瑪）寺（カルマ・カギュ派の早期



図11 僧院内で講義を行うケンポ・カルツェ  
(2013 年 8 月、筆者撮影)

本寺、チベット自治区昌都市）で数年間、ケンポ・ソダジがいる仏学院で 8 年間学問を修めた後、コンヤブ寺の教学責任者となった。彼はチベット東部のナンチェン地域一帯では宗派を超えて信望があり、民衆の精神的支柱と言える存在である。筆者は 2009 年青海省玉樹県に向かう長距離バスに乗り合わせた僧からケンポ・カルツェの存在を知った。そして 2013 年夏、彼の僧院に宿泊し、チベット仏教が直面する諸問

題について直接議論する機会を得た。

ところがそれから4ヶ月後の12月6日に、公安当局が四川省成都市でケンポ・カルツェを拘束したことを、海外のチベット支援活動組織パユル・コム（Phayul.com）等が伝えた（注8）。寺院の関係者と囊謙県の信徒は直ちに約4000人の署名を集め、高僧の解放を求める請願書を当局に提出した。その後、集団で行われた抗議行動及び囊謙県政府との協議を収録した動画がVOA（Voice of America）のウェブサイト他に掲載されたことにより、事件は海外で大きく報じられた。そして2014年10月、海外の報道が「逃亡僧隠匿及び国家機密漏洩の罪で懲役二年六ヶ月が確定」「チベット自治区チャムド市内に収監」と伝えたが、裁判の詳細やその後の服役状況に関する情報は公開されなかった（注9）。

China Detains Popular Tibetan Khenpo and 16 Supporters  
VOA Tibetan さんの動画



図12 ケンポ・カルツェの解放を求めるデモ

## (2) 統一戦線活動への対応と権利擁護の主張

ケンポ・カルツェはケンポ・ソダジ同様、災害救援活動、環境保護活動、貧困扶助、学校教育支援等の社会公益活動に尽力した高僧として知られている。ケンポ・ソダジが国内外で自由な弘法活動が許されている一方で、ケンポ・カルツェは獄中にある（後に釈放か？）。明暗を分けた要因は統一戦線活動への対応とチベット人に対する権利擁護の主張である。以下に具体的な事例（中原一博報告を参照）をあげて、ケンポ・カルツェ事件が投げかけた意味を考察する。

### (a) 宗教政策によるカルマ・カギュ派への警戒

2008年チベット騒乱の過程で、10月27日に昌都県（当時）噶瑪郷の政府庁舎が爆破される事件が発生した。誰がどのような目的で爆破したのかは不明であるが、当局は近くにあるカルマ寺の僧が「関与した」と判断し一部の僧を拘束した。ケンポ・カルツェはコンヤブ寺に助けを求めてきたカルマ寺の僧を隠匿した嫌疑をかけられたのである〔中原2011〕〔中原2014a〕。

カルマ寺はカルマ・カギュ派の早期本寺であり、ケンポ・カルツェが修行した寺でもある。そしてカルマ・カギュ派最高位の化身ラマはインドへ亡命中のカルマパ17世である。つまり逃亡僧隠匿の嫌疑は、中国政府が行ったカルマ寺弾圧の余波であった。カルマ・カギュ派は亡命中のカルマパ17世を中心とする海外組織との連携（国家機密漏洩に相当）を中国政府から常に疑われる弱い立場にある。治安当局はケンポ・カルツェの行動を、宗教組織は海外勢力の影響を受けてはならないという「独立自主自営」の原則（江沢民「四原則」の一つ）に反すると判断したのである。

### (b) 中国政府の宗教管理への反発

2013年10月21日、ケンポ・カルツェは民衆から法要開催の要請を受け、囊謙県に隣接するチベット自治区類烏齊県に向かっていた。中国政府の宗教管理では、僧が居住する

省や自治区を跨いで宗教活動を行うことを禁止している。そこで彼は山越えの道を歩き、公路上の検問所を迂回して法会会場に到着した。後日、当日の行動を記した手記を発表し、中国政府の過度な宗教管理に疑問を呈すると同時に、宗教活動の自由拡大を堂々と主張した〔中原 2014b〕。

### (c) チベット人の権利擁護を主張

筆者はコンヤブ寺で小学生を対象とした多言語教育（チベット語・英語・漢語）の現場を確認した。教師は寺院が雇用したチベット人である。英語と漢語は彼らが将来中国もしくは外国で暮らす際に必要な言語である。ケンポ・カルツェが最も重視するのは、チベット人の誇りを保ち仏教を学ぶ土台となるチベット語の学習である。現在中国政府は少数民族に対し、民族言語の学習を制限する方針を強めている。コンヤブ寺が進める多言語教育は、チベット人の権利擁護を視野に入れた自主的な活動である。

2010年4月14日、青海省玉樹県一帯で大震災が発生した。ケンポ・カルツェは当日、僧を連れて現場に駆けつけ救援活動を開始した。ケンポ・カルツェが率いたコンヤブ寺救援隊の献身的な活動は多くの被災者の心に希望の灯りをともした。後日、支援者が撮影した救援活動の映像を編集し、記録映画DVD『災難の中の希望』（災難中の希望）として公表したが、当局に没収されてしまった〔中原 2014c〕。筆者がコンヤブ寺の僧坊で作品の一部を鑑賞した際、映画は救援に参加したチベット人の勇敢さと被災者の忍耐力を称え、仏教がもつ包容力を描いた内容であることを確認した。聞き取り調査では、ケンポ・カルツェは映画の内容をめぐって、政府との間に軋轢が生じていることを認めた。

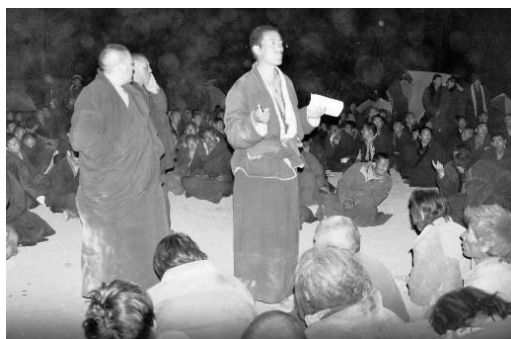


図13 玉樹震災で被災者に語りかけるケンポ・カルツェ

このようにケンポ・カルツェの宗教活動には、学問伝授や修行指導の他に、チベット人の尊厳・権利・宗教文化を擁護する内容が含まれている。その結果、チベット自治区チャムド市や青海省玉樹チベット族自治州一帯では、「チベット人を守り社会に働きかける高僧」として民衆から大きな支持を得てきた。しかし残念なことに、彼の民族心に根ざした活動が公安当局に警戒され、今回の身柄拘束事件の遠因になったと見られる。

### (3) ケンポ・カルツェ釈放か？

2013年12月に身柄が拘束され、懲役刑に処されたケンポ・カルツェは、その後どのような状況に置かれているのであろうか。ノルウェーのオスロに拠点を置きチベット支援活動を展開する「西藏之声」(The Foundation Voice of Tibet) が2016年7月16日に公表した情報によれば、ケンポ・カルツェは6月4日に四川省成都市近郊の刑務所から釈放されたそうである（注10）。そして2日後の7月18日、ワシントンに拠点を置く「自由亜細亞電台」(Radio Free Asia) が、情報提供者はスイス在住の亡命チベット人であり、ケンポ・カルツェは一旦釈放されたが、身柄は当局の監視下にあり、自由な行動及びコンヤブ

寺への帰還は許可されていないとのこと（注11）。「西藏之声」には、釈放後のケンポ・カルツェの写真も掲載されている（図14）。



図14 釈放(?)後の  
ケンポ・カルツェ

中国では宗教指導者が関係する刑事事件の情報（起訴・公判・判決・刑の執行・釈放等）が公安や司法当局から公表されることは稀であり、ケンポ・カルツェ事件に関する情報も非公開である。刑期2年半が正しい情報であれば、身柄拘束から約2年半後の6月4日釈放は辻褄が合っている。中国では6月4日は政治的に敏感な意味合いをもつ記念日である。1989年第二次天安門事件の際、民主化を求める学生や労働者に対して、6月4日に中国共産党が武力弾圧したことに由来する。中国政府が6月4日に釈放した理由は、適正な刑法運用というメッセージを海外のチベット支援組織や人権擁護団体に届けるため、と読み取ることも可能である。

ただし、二つの報道をもってケンポ・カルツェが刑期満了により釈放されたと断定することは難しい。服役中に著しく健康を害し、社会復帰が困難な状況にあるとも考えられる。チベット仏教の高僧テンジン・デレク（1950–2015、[川田 2015:16]）のように、釈放後の宗教指導者が短期間の内に死亡した事例がいくつもあるからだ。

最後に、チベット人の権利擁護の旗を掲げ、共産党の統一戦線活動に妥協しない態度を貫いたケンポ・カルツェとコンヤブ寺で再会できることを筆者は切に願っている。

**【附記】** 本稿は国際研究フォーラム「東アジアのグローバル化と宗教文化」（日時：2016年10月16日、場所：國學院大學渋谷キャンパス、主催：國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所）における口頭報告に質疑応答の内容を加えて再構成したものである。ただし、第4章から7章は、櫻井義秀編著『現代中国の宗教変動とアジアのキリスト教』（北海道大学出版会、2017年）第13章「明暗を分けたチベット仏教の高僧——中国共産党の宗教政策と権利擁護の主張」（川田進）と重複する。

#### 【注】

- 1 「北京雍和宮預計今8万人焼頭香祈願」（2013年2月16日）  
[http://www.yonghegong.cn/2013-02/16/content\\_27968207.htm](http://www.yonghegong.cn/2013-02/16/content_27968207.htm)（2017年3月13日閲覧）
- 2 「雍和宮実施免費贈香、建設生態寺院經驗介紹」（2014年2月19日）  
[http://www.yonghegong.cn/2014-02/19/content\\_31521724.htm](http://www.yonghegong.cn/2014-02/19/content_31521724.htm)（2017年3月12日閲覧）
- 3 「班禪額爾德尼・確吉杰布大師在雍和宮為地震災區舉行祈福法會」（2015年4月30日）  
[http://www.yonghegong.cn/2015-04/30/content\\_35462353.htm](http://www.yonghegong.cn/2015-04/30/content_35462353.htm)（2017年3月12日閲覧）
- 4 「全国政協民宗委主任朱維群帶隊到雍和宮考察工作」（2016年6月20日）  
[http://www.yonghegong.cn/2016-06/20/content\\_38702092.htm](http://www.yonghegong.cn/2016-06/20/content_38702092.htm)（2017年3月12日閲覧）
- 5 カルマ・カギュ派には、シャマルグループが認定したもう一人のカルマパ17世（タイエ・ドルジェ）がいるが、少数派の支持に留まっている。
- 6 国家發展改革委・外交部・商務部「推動共建絲綢之路經濟帶和二十一世紀海上絲綢之路的願景与行動」（2015年3月28日）、中国網。  
[http://www.china.org.cn/chinese/2015-09/15/content\\_36591064.htm](http://www.china.org.cn/chinese/2015-09/15/content_36591064.htm)（2016年8月24日閲覧）



2105年9月18日から20日にかけて、中国社会科学院世界宗教研究所・国家宗教事務局外事司・中国宗教学会が共催した中国社会科学論壇（フォーラム）にて、“一帯一路”と宗教対外交流」をテーマとするシンポジウムが開かれた。

[http://www.cssn.cn/zx/bwyc/201509/t20150918\\_2373013.shtml](http://www.cssn.cn/zx/bwyc/201509/t20150918_2373013.shtml)（2016年8月24日閲覧）

- 7 国際仏学会ウェブサイト <http://www.buddhistweb.org/>
- 8 “Two abbots of Nangchen monasteries arrested and released after public intervention”  
<http://www.phayul.com/news/article.aspx?id=34347&article=Two+abbots+of+Nangchen+monasteries+arrested+and+released+after+public+intervention>（2015年9月16日閲覧）
- 9 「囊謙県住持尕才被判兩年半」RFA 自由亞洲電台普通話  
<http://www.rfa.org/mandarin/yataibaodao/shaoshuminzu/dz-10202014120737.html>（2015年9月17日閲覧）
- 10 「西藏囊謙県堪布尕瑪才旺服刑兩年半後獲釈」（2016年7月16日）、西藏之声。  
<http://www.vot.org/cn/%E8%A5%BF%E8%97%8F%E5%9B%8A%E8%B0%A6%E5%8E%BF%E9%AB%98%E5%83%A7%E5%99%B6%E5%B0%94%E6%AC%A1%E8%BF%91%E6%97%A5%E4%BB%8E%E4%B8%AD%E5%85%B1%E7%9B%91%E7%8B%B1%E4%B8%AD%E8%8E%B7%E9%87%8A/>（2016年12月18日閲覧）
- 11 「公雅寺住持尕才獲釈 藏人被令参加“假班禅”伝法会」（2016年7月18日）、自由亞洲電台普通話。  
<http://www.rfa.org/mandarin/yataibaodao/shaoshuminzu/dz-07182016122446.html>（2016年12月18日閲覧）

#### 【図版】

- 1 <https://www.google.co.jp/maps/@39.9480032,116.4160572,17.5z?hl=zh-CN>
- 3 「班禅額爾德尼・確吉杰布大師在雍和宮為地震災區舉行祈福法會」（2015年4月30日）  
[http://www.yonghegong.cn/2015-04/30/content\\_35462353.htm](http://www.yonghegong.cn/2015-04/30/content_35462353.htm)（2017年3月12日閲覧）
- 4 「印度国防部長帕里卡爾一行參觀雍和宮」（2016年5月9日）  
[http://www.yonghegong.cn/2016-05/09/content\\_38410774.htm](http://www.yonghegong.cn/2016-05/09/content_38410774.htm)（2017年3月12日閲覧）
- 7 「陸と海のシルクロード・中国の「一帯一路」構想とは？」  
<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20150511-00000006-wordleaf-cn>（2016年3月6日閲覧）
- 9 西拉巖木參（ラルン五明仏学院修行者）の微博（2015年11月7日）  
[http://weibo.com/u/5066957349?refer\\_flag=1005055014\\_&is\\_hot=1#\\_loginLayer\\_1472025181681](http://weibo.com/u/5066957349?refer_flag=1005055014_&is_hot=1#_loginLayer_1472025181681)（2016年8月24日閲覧）
- 10 「2015 索達吉堪布非洲弘法」智慧德育網  
<http://www.zhibeidy.com/index.php?a=shows&catid=1037&id=33330>（2016年8月24日閲覧）
- 12 “China Detains Popular Tibetan Khenpo and 16 Supporters Seeking His Release”  
VOA TIBETAN VIDEO（2014年1月3日）  
<http://www.voatibetanenglish.com/a/china-detains-popular-tibetan-khenpo-and-16-supporters-seeking-his-release/1822872.html>（2016年8月24日閲覧）
- 13 唯色「領導玉樹地震救援的高僧尕瑪才旺被捕已經四个多月」（2014年4月14日）  
[http://woeser.middle-way.net/2014/04/blog-post\\_14.html](http://woeser.middle-way.net/2014/04/blog-post_14.html)（2016年5月7日閲覧）
- 14 「西藏囊謙県堪布尕瑪才旺服刑兩年半後獲釈」（2016年7月16日）、西藏之声。  
<http://www.vot.org/cn/%E8%A5%BF%E8%97%8F%E5%9B%8A%E8%B0%A6%E5%8E%BF%E9%AB%98%E5%83%A7%E5%99%B6%E5%B0%94%E6%AC%A1%E8%BF%91%E6%97%A5%E4%BB%8E%E4%B8%AD%E5%85%B1%E7%9B%91%E7%8B%B1%E4%B8%AD%E8%8E%B7%E9%87%8A/>（2016年12月18日閲覧）

## 【参考文献】

### 日本語文献

- 川田進 2015『東チベットの宗教空間——中国共産党の宗教政策と社会変容』北海道大学出版会
- 中原一博 2011「ウーセル・ブログ『関心喚起：カルマ僧院の僧侶逮捕、避難の現況』当局の陰謀か?」、チベット NOW@ ルンタ・ダラムサラ通信 11 月 14 日  
<http://blog.livedoor.jp/rftibet/archives/2011-11.html?p=2> (2015 年 9 月 17 日閲覧)
- 中原一博 2014a「拘束されている高僧が『私の解放のためにことを起こすな』と手紙」、チベット NOW@ ルンタ・ダラムサラ通信 1 月 4 日  
<http://blog.livedoor.jp/rftibet/archives/2014-01.html?p=2> (2015 年 9 月 17 日閲覧)
- 中原一博 2014b「ウーセル・ブログ『逮捕されて 47 日になるケンポ・カルマ・ツェワンの逮捕一カ月前の記録』」、チベット NOW@ ルンタ・ダラムサラ通信 2 月 6 日  
<http://blog.livedoor.jp/rftibet/archives/2014-02.html?p=2> (2015 年 9 月 17 日閲覧)
- 中原一博 2014c「ウーセル・ブログ『ジェクンド地震で救援活動を指導した高僧カルマ・ツェワン師が逮捕されて既に四ヶ月余り』」、チベット NOW@ ルンタ・ダラムサラ通信 4 月 16 日  
<http://blog.livedoor.jp/rftibet/archives/2014-04.html> (2015 年 9 月 17 日閲覧)

### 漢語（中国語）文献

- 伝喜法師 2014『永恒的甘露』中国文史出版社
- 慈誠羅珠堪布 2014『我們為何不幸福』貴州人民出版社
- 達照 2015『退一步並不難』中国商業出版社
- 嘎・達哇才仁 2010『当代藏伝仏教活仏——信徒認同和社会影響』中国藏学出版社
- 国家宗教事務局宗教研究中心 2010『中国五大宗教論和諧』宗教文化出版社
- 黄崇文 2001『歴代班禪与雍和宮』民族出版社
- 晋美彭措 2014『不離』（口述：晋美彭措、編訳：索達吉）、華文出版社
- 江沢民 1993「高度重視民族工作和宗教工作」中共中央文献研究室総合研究組・国務院宗教事務局政策法规司編『新時期宗教工作文献選編』宗教文化出版社、1995 年、249-255 頁
- 江沢民 2002「全面建設小康社会、開創中国特色社会主义事業新局面」『中国共产党第十六次全国代表大会文件匯編』人民出版社、1-56 頁
- 索達吉堪布 2012a『苦才是人生』甘肅人民美術出版社
- 索達吉堪布 2012b『做才是得到』甘肅人民美術出版社
- 索達吉堪布 2015『你在忙什麼』民主与建設出版社
- 希阿荣博堪布 2012『寂靜之道』世界圖書出版公司北京公司
- 星雲大師 2015『不要緊』現代出版社
- 一行禪師 2015『幸福来自絶对的信賴』河南文芸出版社
- 中共中央 1982「關於我国社会主义時期宗教問題的基本觀點和基本政策」中共中央文献研究室総合研究組・国務院宗教事務局政策法规司編『新時期宗教工作文献選編』宗教文化出版社、1995 年、54-73 頁
- 中共中央・国務院 1991「中共中央、国務院關於進一步做好工作若干問題的通知」中共中央文献研究室総合研究組・国務院宗教事務局政策法规司編『新時期宗教工作文献選編』宗教文化出版社、1995 年、213-221 頁
- 卓新平・鄭筱筠 2015『宗教慈善与社会發展』中国社会科学出版社
- 中共中央組織部 1991「中共中央組織部關於妥善解決共產黨員信仰宗教問題的通知」中共中央文献研究室総合研究組・国務院宗教事務局政策法规司編『新時期宗教工作文献選編』宗教文化出版社、1995 年、205-207 頁